大学図書館の障害者サービスにおける特徴と課題

百花　葵

近年の日本の大学では、障害をもつ学生が増加するなか、2021 年の障害者差別解消法の改正によって、教育・研究などの幅広い学生生活における更なる障害者支援が求められている。そして、大学図書館においても多様な障害者サービスを検討する必要性が高まっている。しかし、日本の大学図書館における障害者サービスの体系的な研究はなされていない。本研究の目的は、アメリカと日本の大学図書館における障害者サービスについて、理論と実践の両面から整理したうえで、日本の大学図書館における障害者サービスの特徴と課題を包括的に示すことである。

研究方法は、アメリカと日本の大学図書館における障害者サービスに関する文献を対象とした質的内容分析である。収集した分析対象の文献から、大学図書館における障害者サービスの 13 の観点（①思想・理念、②障害法の適用範囲（障害者サービスに関する法律）、③大学図書館の運営・管理、④図書館サービス、⑤設備、⑥資料コレクション、⑦補助・支援ツール、⑧大学図書館における障害者雇用、⑨キャリア支援、⑩図書館の教育、トレーニング、専門能力開発、⑪ALA カンファレンス（イベント）、⑫ALA の出版物と通信（Web アクセシビリティ）、⑬他部署・他機関との連携）について記述された文章を抽出し、それらの文章を対象として観点の種類ごとにコードを付与した。その後、付与したコードに基づいて議論を整理し、アメリカと日本の大学図書館における障害者サービスの特徴を観点ごとに理論と実践に分けて記述した。最終的に、観点ごとの特徴を分析したうえで、アメリカと日本の大学図書館における障害者サービスの課題と、アメリカと比較した際の日本の大学図書館における障害者サービスの特徴と課題を詳述した。

アメリカと日本の大学図書館における障害者サービスの特徴と課題を比較した結果、日本の大学図書館における障害者サービスでは、特定の障害に特化したサービス・障害者への専門サービスの提供、Web に限定しない様々なコレクションやサービスに対するアクセシビリティ、ボランティアや委託業者の積極的な活用、「多様性への取り組み」としての障害者サービスの位置付け、特定の障害を対象とした研究や報告、障害者のみが利用可能な資料の整備、法律に対する多様な意見・意見書の提出、などの特徴がみられた。その一方で、日本の大学図書館における障害者サービスの課題として、ユーザビリティの確保、ボランティアに依存しない体制づくり、障害者サービスの議論の推進、コーチングの実施、介助動物についての検討、障害者サービス用資料の提供対象の拡大が浮かび上がった。

（指導教員　小泉　公乃）